

## 活動報告書

報告者氏名：稲田健実 所属：福島県立平養護学校 記録日：平成27年2月27日

### 【対象児の情報】

- 学年 中学部第2学年
- 障害名 肢体不自由（脳性まひ） 知的障がい
- 障害と困難の内容
  - ・姿勢の保持が難しい。
  - ・伝えられる音声言語は限られた言葉のみである。
  - ・「はい」と言えるが、それが質問に対する応えなのかは、はっきりしない。
  - ・要求することはできるが、目的を伝えることが難しいので、要求の意味がはっきりしないことがある。

### 【活動目的】

- 当初のねらい 「伝わった」喜びを実感することで「伝えたい」という思いを拓げていく。
- 実施期間 2013年5月～
- 実施者 稲田健実
- 実施者と対象児の関係 学級担任

### 【活動内容と対象児の変化】

- 対象児の事前の状況
    - ・教師のこれからの行動の選択の問いかけに対し「ハイ」と答えることがほとんどで、本人の意思と合っているか判断ができないときがある。
    - ・絵本や写真カード、手で操作するおもちゃなどが好きである。
    - ・教師の問いかけに笑顔で返事をしたり、自分から笑顔で接したりするなど安定した気持ちで過ごすことが多い。
    - ・身体接触、特に「こちょこちょ」が大好きである。
- それまで、授業の始まりの挨拶において、「ステップバイステップウィズレベル」を使っていたが、挨拶をするという意図で押しているということではないように思えた。
- そこで選択行動の実態を捉え直し、計画や予測を立てた取り組みが必要であると考えた。
- そこで、下記の中邑賢龍氏の「選択のレベル」(『AAC 入門～コミュニケーションに困難を抱える人とのコミュニケーションの技法』こころリソースブック 出版会 P89)を参考に、実態の捉え直しをしていった。対象児はこのスケールでは「レベル2」と評価をした。



「選択のレベル」

『AAC 入門～コミュニケーションに困難を抱える人とのコミュニケーションの技法』P89

中邑賢龍

レベル	方 略
レベル 1 2つのものを選択する	まず、A が与えられている。その反応を観察する。次に B を与えてみる。その反応からどちらが好みか判断する。
レベル 2 2つの実物やシンボルを選択する (Yes/No サインやものの名前の理解は必要としない)	2つのものを呈示して、「A が欲しい？」と尋ね、視線や手をのばす方向からどちらが欲しいか判断する。
レベル 3 2つの実物やシンボルを選択する (Yes/No サインを必要とするが、ものの名前の理解は必要としない)	2つのものを呈示して、「A が欲しい？」と尋ね、反応を待つ。受容のサインの発信があればそれを与える。拒否、あるいは無反応ならば、「B が欲しい？」と尋ね。反応を待つ。
レベル 4 2つの実物やシンボルを選択する (Yes/No サイン、ものの名前の理解を必要とする)	「A が欲しい？それとも B が欲しい？」と尋ねる。

「実物を示されて直接選ぶ」と「実物の代わりに写真や絵カードを示されて直接選ぶ」ことはできているが、「物や言葉で示されて、Yes/No などのサインで答えて選ぶ」ことは難しいと評価した。また、直接選べるといっても、はっきりとしない曖昧さがあること。具体物でかつ、直後に結果が得られる物でしか学習できていないことなど、不十分さがあることもわかった。

そこで選択レベルのアップではなく、対象児のもっている選択の能力を活かして、できることを増やしたり、バリエーションを拡げたりするということを考えた。

○活動の具体的内容

取り組みのねらいとしては、

- ①本人が興味があり、選択するメリットを感じられる「場所の選択と移動」ができるようになる。
- ②伝えようとする行動を増やしたり、拡げたりする。
- ③ゆくゆくは言葉でも選び取れることをねらって、場所とシンボルと言葉の結びつきを促していく。

と考えた。行き先には対象児が期待でき、メリットがある場所を設定した。具体的には、バスの

乗降場（バスを見るのが好き）と、図書室（乗り物の本が見られる）を設定した。

そこで、iPad のアプリである「DropTalk HD」の導入を考えた。このアプリの選択のポイントは、「音声フィードバックを一定にすることで、シンボルと音声、場所の結びつきを促す。」ということを重視したことである。アナログのカードでは、カードを選んだときに教師のフィードバックが「バスだね。」とか「そうだね。」などとまちまちに変化してしまい、対象児にとっては捉えにくいものになってしまうことがあるように思った。示したいことを自分の押したタイミングで発声してくれることは、とても意味があるのではないかと考えた。



具体的には、対象児が行きたい場所、行かなければならない場所を「DropTalk HD」を使って選択、表出し、実際にその場所に行くという活動である。週3単位時間実施者で行った。教師は、対象児が選んだ選択肢と行き先が結びついているか、行き先についてどのくらい理解できているかを評価しながらすすめる。その中で、下記の表のような手法を用いながら、意思の表出の確認をした。また、指さし等を大切にしながら、活動の範囲を徐々に広げていった。

フィードバックを大切に する	意図するシンボルを選んだ時には多いに反応し、すぐに「○○に行きたいんだね。」とフィードバックする。
明らかな誤入力には反応 しない	誤って意図しないシンボルを選んだ時には指摘せずに、無反応とする。
選んだ場所には必ず行く	対象児が選んだシンボルが示す実際の場所には必ず行くようにし、「思いが叶う」ことを伝えながら、選択肢と場所のマッチングをねらう。
1画面中の情報量	シンボルは1画面に1つ→2つ→4つ→9つと、生徒の理解に合わせてスモールステップで増やす。
「点と点」から「線」へ	場所を選択してその場所に行く。はじめは、選択した場所と目的の場所の点と点の活動であったが、その間の過程や道中のかかわりも大切にしていく。例えば、道中でのあいさつや交差点でのその場所への指さし行動などを大切にする。



○対象児の事後の変化

・ねらい①について

「行きたい場所を選択する」ことや「行き先についての理解」については、図書室の前で「ここはどこ？」と聞くとアプリ上の図書室のボタンを押せるようになったことや、目的地に行く途中の廊下の分岐点で曲がる方向を指差しで示せるようになった。



・ねらい②について

「伝えたい」という思いは、拡がりつつあると思われる。指さしや「検温」等を表すサイン、要求を表す「あー」という声など、従来なかった行動が出てきたことから考えられる。

・ねらい③について

朝の会が終わった後に係活動で健康調査票を保健室に届ける活動をするのであるが、初めのうちには「朝の会が終わったので保健室に行きますよ。」の言葉かけで、「保健室」のシンボルを選び、保健室へ移動していた。理解が進むと、「次はどこに行くのかな？」の言葉かけで、「保健室」のシンボルを選んで移動でき、さらに、問いかけ無しでも、「保健室」のシンボルを選び、移動できた。また、iPad が無いときには、保健室への途中に指さしで方向や場所を示しながら、移動することができた。

iPad に興味関心をもちながら楽しんで取り組めたことや、「DropTalk HD」の活用で、発せられる音声のシンプルさが対象児にとって理解しやすかったことあり、思いが伝わるツールとしての武器となりつつある。



【報告者の気づきとエビデンス】

○主観的気づき

☆対象児は何を手がかりに選択し表出しているのだろうか。

○エビデンス

上記の2つを確認するために下の表のような介入と観察を行った。

方 法	対 象 児 の 反 応	考 察
音声を消してみる。	シンボルをタップしても音声が発声	操作の結果、音声が聞こえること

	<p>されないと、「あれっ」と思って、何回もタップし、でも音声が発声されないと、教師に「あー」と言って、iPadを差し出した。これは、例えば、アプリが固まって動作しなくなったときも、同様に訴えることができた。</p>	<p>が理解できている。音声を出そうという意図をもっている。</p>
<p>シンボルは空白、音声だけ発声される。</p>	<p>そもそも画面をタップしようとしたので、教師に「あー」と言って、iPadを差し出した。教師がタップし、音声が出ることをしてみると、タップはしてみたものの、「違う」といった感じでiPadを差し出した。</p>	<p>シンボルにも意識を向けている。操作の手掛かりにしていると思われる。</p>
<p>シンボルの位置を変更してみる</p>	<p>初めは元の場所にあった違うシンボルを押し、音声を聞いて、「違う」と思い、もう一度見回して、本来押すべきシンボルを見つけ、思い通りの音声が出るのを確認した後に、教師の方を見た。</p>	<p>位置を手掛かりにしているが、音声を聞いて違いに気づいている。シンボルの違いよりも音声の違いの方が認識しやすい。</p>
<p>シンボルと音声のマッチングを変えてみる。</p>	<p>先の「朝の会」と「帰りの会」のシンボル（よく似ている）で音声を逆にしてみたところ、朝は「帰りの会」のシンボルで音声「朝の会」というボタンを選択した。</p>	<p>シンボルを見ながらの選択はできるものの、音声の方が優位で、シンボルの細かな違いの気づきはまだ難しいようである。</p>
<p>選ぶ頻度の高いシンボルを画面から外してみる。</p>	<p>フリックして探し、求めているシンボルがないと、あきらめてしまうことをあったが、「あー」と言って、教師にiPadを差し出すこともあった。</p>	<p>よく使うシンボルの識別はできている。</p>
<p>要求したものと違うものを渡してみる。</p>	<p>iPadで「体温計」と選択し、「ホワイトボードマーカー」を渡そうとしたら、受け取らず、自らもう一度「体温計」と選択した。</p>	<p>理解しているものであれば、「それじゃない」ということを、表出することができた。ものとシンボルのマッチングができているように思う。</p>

上記の表の結果から、対象生徒の理解や表出について次のように整理した。

音声のフィードバックがもっとも優位だが、シンボルの違いや配置なども組み合わせて理解しているようである、選択を促すときや、新しい言葉を教えるときには、分かりやすいシンボルの使用や、配置の工夫が有効な手立てになると思われる。

#### ○その他エピソード

「朝の会」が始まる時に、あえて「朝の会」という言葉がけをしなくて、「さあ、つぎをやるかな。」と待っていると、自ら「朝の会だよ。」という右の頬をぼんぼんとたたきサインをすることができた。サイン、シンボル、音声や言葉の理解の状況をしっかりとつかむことで、対象児の意思表示の拡がりを促している。この朝の会のサインについては、さらにこんなエピソードがあった。日直の当番であるが、クラスメイトのAくん（「はあはあ」と呼んでいる）が日直である火曜日の朝、登校してくるときの車中で、お母さんが、後部座席で対象児が何かやっているなと思って見てみたら、右の頬をぼんぼんとたたきながら「はあはあ」と言っていたそうである。「今日の朝の会はAくんだよ。」と教えてくれていたそうである。サインと音声を組み合わせて表出することができたエピソードであった。



#### ・今後の見通し

指導者が変わってしまったときに、子どもの実態の目標が伝わらないことが残念ながらあるように思う。ここには教師の主観的な、あいまいな評価が入ってしまうからであろうと思われる。かわる人が変わってもきちんと指導が継続できるように、より客観的な評価、エビデンスが必要であると考え。例えば、選んだものと違うのが手元に来た場合どうするか、また、選んだカードと違うところに行った場合どうするか、などの観察と検証を経て、慎重に理解度を評価していきたいと思う。と同時に、iPadがあるときとないときの違いということもふくめて、手立ての効果についても検証していきたい。

「伝わった」という喜びを、他の多くの人とも経験し、さらに、ご家族も含め多くの人々との間でもストレス無くコミュニケーションができて、そして、「さらなるコミュニケーションの拡がり」とともに、本人らしく生き生きと楽しい人生を送ってほしいと心から願っている。そして、そのようになるようにこれからも支援をしていきたい。